子どもの生きがい

北岡順子

生きがいとは、辞書によると、「生きているだけの効力、生きている幸福、利益、生きていることに意義、喜びを見いだして感じる心のはりあい」などとある。

大人が「あなたの生きがいはなんですか」と問われた時、ある人は「子どもが生きがいです」と答え、ある人は「仕事に生きがいを感じます」というような答え方をする。このように、生きがいという言葉は二通りに解釈されている。つまり、前者は生きがいの対象、生きがいを生み出す源となるものを意味し、後者は行為そのものの中によろこびを感じた時、あるいはその仕事に使命感を感じ、自分を必要としているのだという意識を持った時など、生きがいを感じている精神状態を意味している。生きがいを感じる心は、いろいろの要素が入り混ざっていると考えられるが、一番素朴な形は、いきいきとしたよろこびを心の底から感じることであろう。

〝ある人に真のよろこびをもたらすものこそ、そのひとの生きがいとなりうるものであるといえる〟(1)

それでは、子どもにとっての生きがいとは一体何であろうか。子どもを産み育てる母親が、子どもを生きがいだと断言するような、強い生きがいの対象、源は少ないと思われる。子どもが生活の中で感じるいきいきとしたよろこびが、生きがいをもたらすものと言えるだろう。ここでは、このような生きがい感について、三人の子どもたちの生活の中からさぐってみたいと思う。

★K子（二歳五ヵ月）

生活の中心は、姉と遊ぶこと、絵本を見ること、テレビを見ること、などである。絵本の中に自分の知っている事物を認めてはよろこび、絵を見ながら、読んでもらった話を思い出したり、自分で話を作ったりして、一人で話しながら楽しんでいる。テレビを見ている時には、次にはどのような場面が展開されるかをすでに知っていて、その予測が当たると一段とよろこぶ。特に、毎日見ている幼児向けの番組とか、何度も何度もくり返し放映されるコマーシャルなどでは、「ほらほら、みてて、あの人ころぶから」と大人に前もって知らせ、その予測通りになると得意げによろこびを表現している。

また姉と一緒のことをして遊びたがる。R子が絵を描き出すと自分も描きたがる。今は、なぐり描きの段階から図式画の段階へ移行しつつある状態で、一人で訳のわからないものを描きながら、「これワンワン。まる、さんかく」と名づけながらよろこんで描いている。お人形ごっこなども、まだ一緒に協力して行なうことはできず、姉と一緒のことをしているだけで満足している。

一番上の姉のT子が加わると状況が少し変化してくる。T子が、「K子ちゃん、このかごを持っておつかいに行ってきてちょうだい」とか「ここは赤ちゃんの寝るところなの。一緒にねんねしてあげて」など、K子が仲間にはいれるようなさそいかけ、指示を行なうので、それらに従うことによって、仲間に入れてもらったと感じ、よろこんで遊んでいる。

また、自分の知っている童謡、コマーシャルソングなどを家族の者に歌って聞かせ、周囲の大人がほめると得意になり、さらにはふざけた調子で何度も何度もくり返し歌ってはよろこんでいる。その他、今までできなかったことができるようになった時、たとえばテレビの上に手が届くようになったとか、積木で家らしきものが積めたとか、やっと便所で排せつを行なえるようになったとか、このような場合「ほらできた、みんな見て」と家族の者に示したり、自分で、「ようやる」など一人ごとを言ったりしてよろこびを表わしている。

★R子（四歳九ヵ月）

姉のT子が幼稚園へ行っている午前中はとてもおとなし

い。一人で絵を描いたり、絵本を見たりして、ただ黙々と遊んでいる。お人形ごっこなどをしても、新しい発展もなくすぐとぎれてしまう。K子と二人ではうまく遊べず、K子は遊びを邪魔する存在としてとらえられている方が多い。「私のお人形をさわった」とか、「せっかく描いた絵にいたずらをした」とか、すぐにけんかになってしまう。

T子が帰宅するととたんに元気になる。姉と同じことをしたい、姉のようになりたいという欲求が非常に強く感じられている。したがって、姉と一緒に遊ぶこと自体が大きなよろこびで、何でも一緒のことをしたがる。T子が自転車に乗ると言えば自分も自転車に乗るし、お人形ごっこをしようと言えばお人形ごっこをするし、絵本をみよう、絵を描こう、レコードを聞こうと言えば、すべてそのとおりのことをする。姉が友だちの所へ遊びに行くと言えば、一緒について行きたがるし、姉とおそろいの服を着ることを好む。

このように生活のすべてにおいて、自分の欲求よりも「お姉ちゃんはどうするの?」と、姉のすることの方が大きな比重を占めて考えられている。したがって、この欲求がすべての生活を支配しているので、「お姉ちゃんのようになる」という目標に到達できたと自分で認識した時、強いよろこびを感じている。このことが最もはっきりと現われるのは、絵を描いている時である。姉と一緒に絵を描いていると、どちらが上手に描けたかにこだわる。R子なりにいつもより上手に描けていても、自分で姉より劣っていると判断すると怒りを感じ、せっかく描いたものをくしゃくしゃにしてしまったり、破ってすてたりしてしまう。このような強い対抗意識を持ちながら絵を描くので、近ごろは、姉の描いたものと区別がつかないくらいの腕前となった。描く対象はもっぱら「女の子」で、「こんどはどんな髪型の子にしようか、洋服は長いドレスにしようか、短いスカートがいいかしら、くつはどんなのにしようか」と一つずつ楽しみながら描いている。

また、文字に対しても興味を示しはじめ、お正月には姉と一緒にカルタとりをしたり、絵本の文字を拾い読みしたり、描いた絵に自分の名まえを書いたりしている。文字を読んだり、書いたりできるようになったことも、姉の位置に一歩近づいたこととして受けとめられ、非常によろこびを感じている。

★T子（六歳八ヵ月）

もっぱら幼稚園での生活が重大関心事であるらしい。帰宅しての第一声が、

「今日、幼稚園で給食たべるの、だれが一番早かったと思う？」にはじまって、

「走るのが一番早いのはY君」

「なわとびが一番上手なのはHちゃん」

「本を一番上手に読むのはSちゃん」

「折紙を一番上手に折るのはYちゃん」

はては、

「お家ごっこをする時、赤ちゃんの泣き方の一番上手なのはAちゃん」

などと、次から次へととび出してくる。このように、すべての事柄が競争の対象となり、一番になることによって集団の中で認められたと感じ、それがよろこびとなって、帰宅早々の報告となるのであろう。

家庭では妹たちのリーダーとして遊んでいる。妹たちに役割を指示したり、場所、方法などをこまかく指示したりしながら、遊びが発展するように工夫をこらし、心くばりを示している。このような時には、妹をかばいながら遊ぶことによろこびを感じている。

また絵本を読むことにも興味を示し、妹たちに読んで聞かせたり、一人で黙読したりしている。「チビクロサンボ」（これは幼稚園で劇あそびを行なってから特に好まれるようになった）や「ふしぎの国のアリス」などの絵物語は、文字を追って読むのが精いっぱいのようすであるが、一生懸命がんばって、一冊を読み通したことにほこりを感じている。

あるいは、オルガン教室で習う練習曲をたどたどしく練習し始め、時には叱られながらも、ともかく自分のものとし、一応弾けるようになった時、「われながらよくやった」といった気持ちになり、ほのぼのとしたよろこびを感じている。そのほか、お姉さんぶった行動、たとえば、泣いているK子をあやかすとか、だっこするとか、あるいは、おつかいに行くなど、このような行動を行なう時にもよろこびを感じ、生き生きと活動している。

以上のように、子どもが生活の中で感じたよろこびが生きがいにつながっていくものである。

〝ウォーコップによれば、人間の活動のなかで、真のよろこびをもたらすものは目的、効用、必要、理由などと関係のない「それ自らのための活動」であるという〟(2)

たしかに、何かを目的として行なう活動よりもやりたくてやる活動の方が真のよろこびをもたらすであろう。したがって、子どもにとっては、「遊び」に没頭している時に感じるよろこびが真のよろこびであり、それが生きがいにつながっていく。それでは遊びの中でよろこびが感じられるのはいかなる時であろうか。いままでできなかったことができるようになった時、あるいは、知らなかったことが理解できた時、このような時に子どもは自分自身が成長した感じを受けとめ、強いよろこびを感じ、生きがい感を持つ。

幼い乳児の段階では、遊びに限定せず、生活そのものの中からよろこびを感じている。きげんのいい時に一人で微笑するとか、手足をバタバタさせてよろこぶとか、これらは純粋に全く生きていること自体によろこびを感じているかのようである。しかし、子どもに感じられるよろこびの強さはそれほど強くないかもしれない。あるいは、母親の顔を認めると笑声をあげるとか、「いないいないばあ」によろこんで反応するとか、これらは知っている人を認めたよろこび、次に起こることへの期待に対するよろこびで、より強いよろこびとして感じられているだろう。さらには、積木が二つ積めたとか、スプーンで食物を口に運べたとか、今までできなかったことができるようになった時、よろこびが一段と強い感じで受けとめられる。これらの状態では、何度も何度もくり返して試みるという努力（子どもには努力として受けとめられていないかもしれない）が存在しているゆえに、到達した時点におけるよろこびはより強く感じられる。年齢が大きくなるにしたがって、結果に限らず、目標に到達しようと努力している過程に生きがいを感じるようになる。したがって、「できてよかった」という結果のよろこびだけにとどまらず、一生懸命打ち込んでいる感じ、何かに向かって前進している感じが生きがいの重要な面になっている。また、結果の判定は客観的におしはかれるものではない。自分自身で「できた」と感じられるものでなければならない。さらには、その結果を母親に認めてもらうとか、幼稚園の友だちに認めてもらうことによって、一そうできたよろこびが強められ、それだけ生きがい感を持つ。

また、子どもはいつも生活の中で、自分自身をより成長させたい、早く大きくなりたいという欲求を持ちつづけている。「お姉ちゃんのようになりたい」という欲求が、生活のすべてを支配しているかのようにみえる。したがって、一つの事柄が「お姉ちゃんのようにできた」というよろこびだけでなく、お姉ちゃんと一緒に遊んでもらった経験（たとえ遊びの中での妹の役割が一人前として認められていなくても）を持つことは、自分自身の成長が確められた気持ちを持たせ、よろこびを感じさせる。一方姉の方は、姉としての存在意義を認められた時、たとえば、おつかいを頼まれたとか、妹のお守りを頼まれた時など「もう大きくなったからお手伝いができるんだ、自分も役に立っているんだ」という気持ち、その時に感じる得意げな感情も生きがい感としてとらえられる。この生きがい感は、大人が職業における使命感を生きがい感を感じる感情につながっていくものであろう。

以上のように、子どもが生きがいを感じる状態は、

・自分の好きな遊びの中で、新しい発見をしたり、努力して成就感を感じた時

・生活全般の中で、自分自身を成長させたい欲求が満たされた時

などである。したがって、子どもが生きがい感を持つような生活を営むためには、周囲の大人の子どもに対する接し方が問題となってくる。まず、子どもたちがのびのびと遊べる場と機会を多く確保することが望ましい。大人の一方的な都合で、何らかの制限が加えられたり、禁止されたりすることがないようにされなければならない。さらには、遊びの中や生活の中で子どもが感じたよろこびを卒直に受け入れ、心から共によろこび、はげましていく態度が望ましい。そうすることによって、子どものよろこびは一そう強化され、強い生きがい感を持つようになる。

成長するにつれて、生活の範囲が家庭内にとどまらず、幼稚園などの集団生活へと広がって行くと、クラスの仲間に認められるということが大きなよろこびとなり生きがい感となる。この場合、その集団での価値判断が大きく関係してくる。つまり、どのような子どもがいい子として認められているかということである。友だちと仲良く協力して遊べるということが奨励されているような集団では、子どもたちはおのずからそれぞれの友だちの長所を遊びの中で

認め、共によろこび合い、はげまし合って生活していくであろう。その反対に、一斉に技能的なことのみ上達するように訓練させる集団では、ただその特定の能力の上手、下手が評価の対象となり、それぞれの子どもの持っている長所が発揮されない。このような場合には、成就感によるよろこびも、仲間に認められるよろこびも、非常に少なくなってしまう。もちろん強い生きがい感を持つこともないまま、満たされない生活を送ることになる。このような事態に陥らないようにするには、保育者が正しい幼児観を持ち個々の子どもの活動が尊重され、仲間どうし助け合っていくような保育を行なうことが望まれる。保育者のあり方によって、子どもの集団のあり方、ふん囲気も規制されてくるものである。

次に、子どもの自分自身を成長させたい、大きくなりたいという欲求は、身近の年長者がその目標としてとらえられている。妹は姉のようになることを目標とし、姉は友だちのようになることを目標とし、さらには母親のようになること（まだ幼児の段階では、母親の役割を部分的に果たすことにとどまっているが）を目標として生活を営んでいる。すでに幼児の時期から、生きる目標を母親において生活しているのであるから、母親の生き方、考え方、生きがいの感じ方が、知らず知らずのうちに子どもの生き方、生きがいの感じ方に、重大な影響を与えることになる。

〃母親は幼児教育など考えるな。その前に、自分自身が生きがいを求めて努力しなさい〃（武蔵野市、西久保保育園近藤薫樹園長）(3)

という警告は、子どもに対する母親の根本的なあり方を示すものとして耳を傾ける必要がある。（松阪女子短期大学）

引用文献

(1)、(2) 神谷恵美子著「生きがいについて」みすず書房
(3) 中日新聞 昭和四十七年十二月二十八日

みどり会主催　幼児教育研修会のお知らせ

日　昭和四十八年八月二十日（水）～二十二日（金）二泊三日
所　栃木県鬼怒川温泉　水明館
費用　参加費　一五〇〇円
　　宿泊費ほか（二泊六食）六〇〇〇円　計七五〇〇円
室員　二五〇名（定員になり次第〆切らせていただきます）
分科会　第一　同郷博先生　第二　津守真先生　第三　本田和子先生　第四　外山滋比古先生　第五　小林つやえ先生

申込み方法は67ページ